中学生までに読んでおきたい哲学 ⑧

はじける知恵

松田哲夫 編

あすなろ書房

茨木のり子 いばらぎのりこ

一九二六（大正一五）―二〇〇六（平成一八）　詩人。本名三浦のり子。大阪市生まれ。幼年期を愛知県西尾市で過ごす。昭和一八年、帝国女子医学薬学専門学校（現・東邦大学）薬学部に入学、昭和二一年、繰り上げ卒業。戦後、戯曲、童話を書き始める。昭和二四年、医師三浦安信と結婚、主婦業のかたわら詩作を始め、「詩学」に投稿。昭和二八年、投稿仲間の川崎洋とともに詩誌「櫂」を創刊。その後は、旺盛に詩作を続け、現代詩を代表する詩人として活躍。夫の没後、昭和五一年より韓国語を学ぶ。詩集に「対話」、「見えない配達夫」、「鎮魂歌」、「人名詩集」、「自分の感受性くらい」、「寸志」、「食卓に珈琲の匂い流れ」、「倚りかからず」、「歳月」。「美しい言葉とは」は昭和四五年、「図書」に発表し、「言の葉さやげ」（昭和五〇）に収録されたエッセイ。

私のいやな言葉、聞きぐるしいと思っている日本語は無数にある。出せといわれたら、ずいぶんたくさん出してみせられるだろう。

日本語について多くの人が語る場合も、たいていは、その否定的な面を指摘することで尽きている場合が多い。いやな日本語を叩きつぶせば、美しい日本語が蘇るというものでもないだろう。否定的な側面を指摘するのと同じくらいのエネルギーで、美しい言葉に対する考えをかきたててゆきたいし、多くの人の、いろんな形による発言を聴きたいものだという願いが、私にはある。

しかし、美しい日本語に対する発言や考察が、ひどく乏しいというのは、どういうことなのだろう。まずいものを食べたときは「まずい、まずい」と大騒ぎするが、おいしいものの通過するときは、割にけろりとしているように、美しいことばというものは、生活の隅々で意識されず、ひっそりと息づき、光り、掬いが

湯川秀樹 ゆかわひでき

一九〇七（明治四〇）―一九八一（昭和五六）　物理学者。東京麻布生まれ。地理学者小川琢治の三男。兄に冶金学者小川芳樹、東洋史学者貝塚茂樹、弟に中国文学者小川環樹。京都帝国大学理学部卒業。昭和一〇年「素粒子の相互作用について」で中間子の存在を予言。昭和一四年、京都帝国大学教授になる。戦後は、日本の物理学、とくに素粒子論の海外への紹介につとめ、プリンストン高等研究所、コロンビア大などで教える。昭和二四年、日本人初のノーベル物理学賞を受賞。帰国後は、京都大学基礎物理学研究所所長をつとめるかたわら、核兵器廃絶、世界連邦建設などの平和運動に積極的にかかわる。物理学、量子力学の専門書以外に、「本の中の世界」、「創造的人間」、「心ゆたかに」など、独自の発想にもとづいた滋味あふれるエッセイも執筆。「知魚楽」はそのひとつ。

色紙に何か書けとか、額にする字を書けとか頼んでくる人が、あとを絶たない。色紙なら自作の和歌でもすむが、額の場合には文句に困る。このごろ時々「知魚楽」と書いてわたす。すると必ず、どういう意味かと聞かれる。これは「荘子*」外篇の第十七「秋水」の最後の一節からとった文句である。原文の正確な訳は私にはできないが、おおよそ次のような意味だろうと思う。

ある時、荘子が恵子*といっしょに川のほとりを散歩していた。恵子はものしりで、議論が好きな人だった。二人が橋の上に来かかった時に、荘子が言った。

「魚が水面にでて、ゆうゆうとおよいでいる。あれが魚の楽しみというものだ。」

すると恵子は、たちまち反論した。「君は魚じゃない。魚の楽しみがわかるはずがないじゃないか。」

荘子が言うには、

*「荘子」―中国古代の思想家・荘子が著した書物。初期道家（どうか）の根本思想を、寓話（ぐうわ）を用いて説いている。内編七、外編十五、雑編十一の三十三編から成る。

*荘子―中国、戦国時代の思想家。諸子百家のなかの道家の代表者。

*恵子―中国、戦国時代の思想家、恵施の敬称。論理学者の一人。宋に生まれ、魏の恵王・襄（じょう）王に仕えた。

白洲正子 しらすまさこ

一九一〇（明治四三）―一九九八（平成一〇）　随筆家。東京麹町生まれ。伯爵樺山愛輔の次女。大正三年から梅若流の能を習い、大正一三年、女人禁制の能舞台に演者としてはじめて立つ。同年、学習院女子部初等科修了、渡米してハートリッジ・スクールに入学。卒業後、帰国して、昭和四年、白洲次郎と結婚。青山二郎や小林秀雄に学んで骨董を愛し、「お能」（昭和一八）をはじめ、日本の美についての随筆を執筆。古美術、古典文学、紀行など幅広い分野で活躍。洋画家の梅原龍三郎や元首相の細川護熙、さらには、河合隼雄や多田富雄などの学者との交友もあった。昭和三八年「能面」、昭和四七年「かくれ里」で読売文学賞を二度受賞。「智恵というもの」は「たしなみについて」（昭和二三）に収録されたエッセイ。

ある時、私はアメリカの女の人達と一緒に食事に招かれました。一緒によばれたのは、みな名流の*婦人達。学問も教養もふつう以上にあるはずの人達でした。ちょうど第一回の選挙*華やかなりし頃のことでしたが、その中の一人が曰く。

「ほんとうにたいへんでしたのよ、……今日は大事な会でしょう、……私、日本の女が無智だと思われるといけないと思って、三日がかりで選挙法やら憲法やら、ほんとに夢中になって覚えて来たんですよ、……今の女がそんなことも知らないといわれては恥ですからねえ」

ああ奥様!!

私はほとほと*涙もこぼれんばかりです。これが学問とか教養とかいわれるものなら、私はそんなもの軽べつします。それよりも、これが現代の日本の女というものなのでしょうか。一夜漬け*の、浅はかな、愛すべきがゆえににくむべき。

＊名流の―世に知られた。

＊第一回の選挙―一九四六年（昭和二一）四月の総選挙。女性が初めて参政権を行使し、三十六人の女性が当選した。

＊ほとほと―まったく。うんざりした気持ちを表わす語。

＊一夜漬け―その場をしのぐために、知識などを一時の間に合わせで習い覚えること。

中学生までに読んでおきたい哲学 ❷

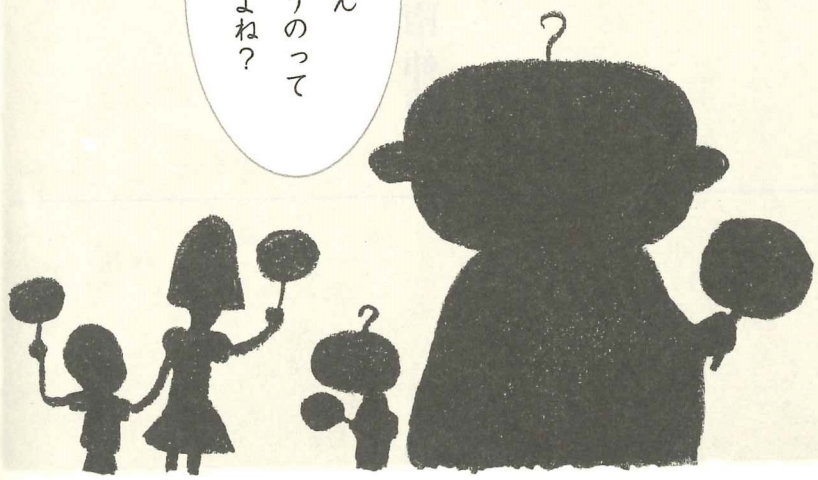
悪のしくみ

松田哲夫 編

あすなろ書房

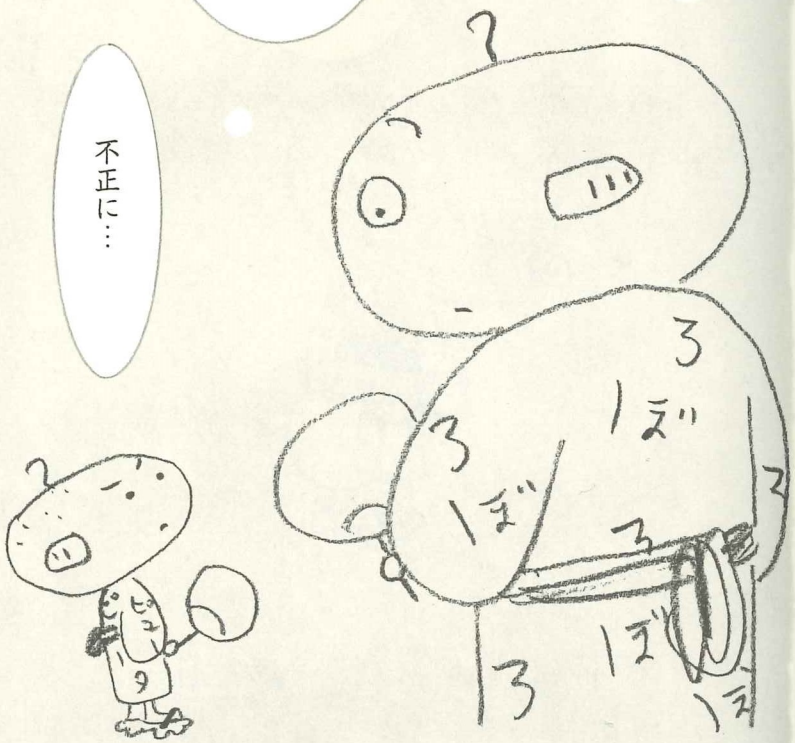
♪ホーホー
ホータルコイ
コッチノミーズハ
アーマイゾ
♪ホーホー
ホータルコイ

おとうさん
甘い汁吸うのって
悪者ですよね？



いや、
甘い汁を
不正に吸うのが
悪者だな

不正に…



池田晶子 いけだあきこ

一九六〇（昭和三五）―二〇〇七（平成一九）文筆家。東京生まれ。慶應義塾大学文学部哲学科倫理学専攻を卒業。専門用語による「哲学」から哲学を解放し、考えるとはどういうことであるかを日常の言葉で美しく語る「哲学エッセイ」を確立し、多くの読者を得る。とくに若い人々に、本質を考えることの面白さと、形而上の切実さを、存在の謎としての生死の大切を語り続けた。著書には「無敵のソクラテス」、「残酷人生論」、「14歳からの哲学――考えるための教科書」、「暮らしの哲学」、「私とは何か――さて死んだのは誰なのか」など。「いじめの憂鬱」は平成一八～一九年、「週刊新潮」連載エッセイの一編で、「人間自身――考えることに終わりなく」（平成一九）に収録された。

「いじめ」というのは、どういうことなのか、もうひとつわからない。

リアリティがないのである。私が子供の頃には、そんなことはなかった。おとなしくて、勉強も冴えなくて、今ならいかにもいじめの標的にされそうな子も、普通に皆とやっていた。男の子が好きな女の子をいじめる。これはあった。お下げ髪*を引っぱられたり、蛙をかざして追いかけられたり、ヘキエキ*したことがあったっけ。でもお互いにそれがどういうことなのか了解していたので、全く陰湿*なものではなかった。その証拠に、その悪ガキは、私が転校する時ワンワン泣いていたもの。

最近の小中学校で行なわれているいじめというのは、えらく陰湿なものらしい。大勢で包囲するようにいじめる。あるいは大勢でいっせいに無視をする。腕力によらない言葉の暴力というのは、場合によっては、さらにこたえるかもしれない。

*お下げ髪―長い髪を編んで肩のあたりに垂らす少女の髪の結い方。

*ヘキエキ―辟易。嫌気がさすこと。

*陰湿―暗くてじめじめしているさま。

倉橋由美子 くらはしゆみこ

一九三五（昭和一〇）―二〇〇五（平成一七）　小説家。高知県香美郡生まれ。明治大学文学部文学科仏文学専攻を経て同大学院中退。在学中に「パルタイ」（昭和三五）を発表。カフカ、サルトルら実存主義的な手法を取り入れ、当時流行の反小説を標榜し、女流文学に新分野を開く。その後、「聖少女」、「妖女のように」などを発表。昭和四一～四二年、アメリカのアイオワ州立大学大学院に留学。その後は、寓話的な抽象小説を執筆する。「スミヤキストQの冒険」、「ヴァージニア」、「反悲劇」、「夢の浮橋」、「アマノン国往還記」（泉鏡花文学賞）など。「子供たちが豚殺しを真似した話」は、昭和五七～五八年「波」に連載され、「大人のための残酷童話」（昭和五九）に収録された一編。

昔、オランダの小さな町で、父親が豚を殺すところをその子供たちが見ていて、やがて父親が出かけると早速豚殺しを真似することになりました。兄は弟に、「お前、豚になれ」と言って弟の咽喉をナイフで切り裂きました。悲鳴を聞きつけて母親が飛び出してきました。そしてこの有様を見て逆上し、上の子の手からナイフを奪うが早いか、心臓をひと突きして殺してしまいました。それからはっと我に返って、ついさっきまで盥でお湯を使わせていた赤ん坊のことを思い出しました。行ってみると赤ん坊は盥の中で溺れて死んでいました。母親は半狂乱になって、そのまま首を吊ってしまいました。間もなく帰ってきた父親も家の中の惨事を見て持病の心臓の発作を起し、あっけなくみんなの後を追いました。

ところが翌日、この豚殺しごっこを見ていた近所の子供たちが集まって、自分たちも豚殺しをやってみようということになりました。そして日頃からいじめら

＊逆上―分別をなくし取り乱すこと。

＊盥―湯水を入れ、顔や手足を洗ったり、洗濯や行水を行なうための桶（おけ）。

＊お湯を使わせていた―入浴させていた。

＊惨事―悲惨なできごと。